

修了生からの  
お便り



# 子どももの心身に 寄り添う 養護教諭に



「健康教育」の講義内で行っている、  
模擬授業の様子



「看護学V」での、視力測定実習

「先生の研究室って保健室みたいで居心地がいい。」学生によく言われる言葉です。保健室は、いつでも子どもたちが利用することができるよう保障していかなければならないし、保健室の中に入ることができずに廊下で覗いているような子どもにも目を向け、また、子どもたちが来ることが想定される時間帯は仕事の手を休められるようにしておくこと、子どもの実態を的確につかみ丁寧に看ていくこと等々、養護教諭として大切にしてきたことを学生に伝えていきます。大学教員となった今も、その意識が抜けきれずにいるため、研究室にはいつも学生がいるような状態です。

大学院を修了して3年目。上越での2年間は思い深いものがあります。現職の養護教諭時代に、ある研究会で出逢った先生に「養護教諭養成に現場経験者が少ないから、現場実践を講義で語れる人材を増やしていきたい。研究の道に來ない？」と誘われ、そんな生き方もいいかもと思ひ、大学院進学を決断したものの「本当に大学教員になんてなれるの？」と半信半疑でした。院生時代は、養護教諭経験者や、これから養護教諭を目指す方と一緒にいる院生仲間とともに「養護教諭とは」をじっくり語り合う機会や、研究だけに没頭できる機会に恵まれたことは貴重な経験となりました。修士論文

を書き上げるのは、自分との闘いの日々でしたが、完成したときは達成感と指導教員への感謝の気持ちでいっぱいでした。それに加え、自分の車がどこにあるのかも分からなくなってしまうほどの大雪や、海や山など、上越の自然豊かな環境に触れられたことも貴重な体験でした。

今の自分があるのは、先生方のきめ細やかなご指導とともに、院生仲間との語りから得た「養護教諭像」の確立であったのだと思います。大学院での学びや経験が、現在の講義や学生指導に活かされています。さらに精進し、学校現場において「子どもの実態をつかみ、心身に寄り添う」ことのできる養護教諭を養成していきます。



中村 千景  
(なかむら ちかげ)

群馬県太田市出身。群馬県太田市内において養護教諭として、小学校8年、中学校3年、高等学校1年の12年間を経験

した後、2008年に上越教育大学大学院生活・健康系コース(学校ヘルスケア)に入学。修了後、京都女子大学での実習助手を経て、2011年9月より帝京短期大学生生活科学科養護教諭コース講師。「学校保健」、「健康教育」等を担当している。最近関心を持っていることは、現職の「男性養護教諭」の活動を支援し、教育実践を世に広めていくこと。